

論文の内容の要旨

氏名：酒見薫

博士の専攻分野の名称：博士（国際関係）

論文題名：変貌する滞日フィリピン人社会

トランスナショナルコミュニティからメタ・コミュニティへ

本論文の背景

有史以来、人類は起源地とされるアフリカから、生存のために、またさまざまな影響を受けて、世界各地の拡散してきた。その後も、人々は絶えず国境や大陸を超えた、大規模な移動（国際人口移動）を繰り返してきた。

近年、世界のいたるところで故郷を離れ、新たな職や仕事や安全な場所を求めて、国境を越えて移動する人々が増大している。彼らはこれまでの移民たちとは異なり、移民受入国と送出国を相互に移動し、行く先々の地での経済と社会の構造を変革し、「トランスナショナルな社会」を形成するようになっている。それは新たな『国際移民時代』の到来を示すものである。（カースルズ&ミラー 2011）

日本においても、1990年代以降、世界各地から外国人が次々と流入してきている。時代のグローバル化や同時に衛星放送やインターネットによって、飛躍的に情報化が進んだことにより、国際移動が迅速かつ容易になったことが挙げられる。

現在、日本における在留外国人は、過去30年ほどの間に、飛躍的に増大している。1990年には約100万人であったが、2022年には300万人を越えるほどになった。（在留外国人統計2022/23）2022年末の国籍地域別在留外国人をみると、多い国順に、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、ブラジル、ネパール、インドネシア、米国、台湾、タイの順となっている。ブラジルと米国を除いた、上位8カ国はアジアの国々の出身者である。移民研究者の宮島喬は、このような新たな移民を「グローバル移民」と称している。（宮島 2022:100）

本論文の研究対象・研究目的—在日フィリピン人のトランスナショナルな視角からの研究

本論文で、日本において増大するグローバル移民の中で研究対象とするのは、在日中のフィリピン人である。2022年末の在留外国人統計によると、在留フィリピン人の数は29万8740人で、全在留外国人の中で4位（9.7%）を占める。彼らは大別して、さまざまな在留資格で就労する出稼ぎ労働者（中長期在留者）と長期的に滞在する定住・永住化しているフィリピン人からなる。

来日するフィリピン人の中で、特に出稼ぎ労働者が増大したのは、1990年代以降の数度にわたる外国人受け入れに関する法的制度が整備されてきたからである。国内における就労者の需要の増大に対応する従来の移民政策を転換するような法改正によって、「技能実習」、「技能・人文知識・国際業務」、「留学」、「特定技能」、「特定活動」などの在留資格で就労・滞在する中長期

在留者と、「永住者」、「家庭滞在」、「定住者」、「日本人の配偶者等」の在留資格をもつ長期的に滞在可能な在留者が存在するようになった。2022 年末現在、後者のカテゴリーに属する在留フィリピン人の割合は、全在留フィリピン人の 75.3%を占めるようになっている。結果として、フィリピン人在留者の増加と定住・永住化につながっている。さらに現在、彼らの高齢化の問題も生じている。

研究対象となるフィリピン人は、①結婚移民、②在日フィリピン人の 1・5 世代、③在日フィリピン人の第二世代、④日系フィリピン人、⑤新日系フィリピン人である。(高畑 2012/2015) 彼らの多くは、日本人との見合い結婚やエンターテイナーとして来日し、その後日本の各地に定着し、様々な職業に就き、生活し、コミュニティを形成している、定住化している人たちである。

本論文では、国際移民としてのフィリピン人女性が、移住先の日本で独自の「トランスナショナルな社会空間」を形成している状況に着目する。国際社会学や文化人類学の分野での近年の理論的動向を踏まえて、これらフィリピン人コミュニティを「トランスナショナルな視角」からとらえるようとする。

グローバル化時代の移民現象の把握と在日フィリピン人コミュニティのフィールドワーク

在日するフィリピン人の移動・就労・生活に関するトランスナショナルコミュニティの現地調査する以前に、フィリピン人が世界に移民として拡散する背景を文献調査によって明らかにした。とくに、世界的レベル、アジアのレベル、日本のレベルでの移民の移動と就労の動向を整理したあと(第1章から第3章まで)、日本に向かうフィリピン人の就労と定住化の問題を取り上げた(第4章、5章)。これらの既存の移民研究を踏まえて、在日フィリピン人コミュニティの現地調査を実施した(第6章)。

現地調査の対象となる在日フィリピン人コミュニティは、群馬県の一地方地域である。現地には、2021年12月より、週末に頻繁に訪問したり、滞在したりすることで、人類学的現地調査を実施できた。現地のフィリピン人居住者はどのような目的を持ち来日し、現在どのような生活を送っているのか、現地での参与観察やインフォーマルなインタビューを通じて明らかにしようとした(第6章)。

とくに、フィリピン人居住者が、どのようなどのようなネットワークを形成し、どのようにして出身地や地元の日本人社会、他の地域に住むフィリピン人と日常的にどのような関係を維持しているか。「トランスナショナルな社会的・象徴的空間(コミュニティ)」が構築されているのか把握することを主たる研究目的としている。

本論文の構成

本論文は、「序論」、「目次」、「第1章から第6章」、「結論」、「文献目録」からなる。全体として、第1章から第3章までは、世界の移民現象の歴史と動向を、世界、アジア、日本のレベルで検討した。第4章では、世界的規模で拡散しているフィリピン人移民の背景、移民に関する制度、移民を志向する経済と文化ならびに近年の日本への就労・出稼ぎ・定住化状況を明らかにした。

第5章では在日フィリピン人社会の先行研究のレビューと新たなトランスナショナルな視角に立った研究を紹介した。第6章では、群馬県X市のカトリック教会を起点とするフィリピン人コミュニティのトランスナショナルな社会空間の形成に係る出来事やイベントや人々の生活について人類学的調査を実施した。各章を簡単に紹介しておく。

第1章では、近年の国際人口移動に見られる主たる流れ、国際移民と国際人口移動の定義と形態、移民の時代的変遷と移民形態の変化、20世紀後半の国際人口移動の特徴と経済移民の誕生、難民などの新たな移民の出現、移民からディアスポラへ、グローバル化時代の移民の新たな挑戦、トランスナショナリズムな視角と空間の形成などを扱った。

第2章では、アジアからの世界への国際移民の三つの流れ（北米・オーストラリア、西アジア、アジア地域内）とそれぞれの特徴、アジア地域内、とくに東南アジアにおけるさまざまな形態の国際移民の増大（難民、女性労働者、非正規労働者、学生、高技能移民）、東南アジアにおける国際移住の現状と展望（政府の関与と期待、移住における女性の増大、ホスト社会への影響）などを取り上げる。

第3章では、移民受入の需要の増大に伴う移民受入国への転換、専門職移民の受け入れ促進、単純労働者へのニーズと3つの窓口（定住者と技能実習制度と不法滞在者・非正規滞在者）の活用、福祉国家の担い手としての新たな制度の創設（外国人看護師・介護福祉士候補生、新たなケア労働者の獲得のための制度変更、外国人家事労働者）、外部的要因で余儀なくされた難民受け入れ、国際移民の地域的分布とその社会的影響、移民受入社会が考えるべきことなどを論議した。

第4章は、世界への拡散と日本への出稼ぎと定住の2部構成である。

第一部ではフィリピン国家の海外移民政策と移民の世界への展開、海外フィリピン人労働者の資格・雇用方法・職業・技能・性による区分、海外雇用政策と各種行政機関の設置による海外労働者の保護と管理などが取り上げられた。

第二部ではフィリピン人の日本への出稼ぎと定住が主要課題である。増大するフィリピン人移民の増大とその特徴、圧倒的な女性を多さと若さ、興行ビザから日本人の配偶者等（結婚移民）の在留資格の変化、フィリピン人の滞在形態の近隣諸国との比較、フィリピン人の居住の地域的分布の特徴（地方都市への分散居住など）、日本で就労・定住化するフィリピン人の動向（エンターテイナーの隆盛と衰退、介護労働者への転換、介護労働者の類型と専門化、介護労働者の就労実態—結婚移民とEPA候補者）、アジアや日本で増える結婚移民、定住・永住・トランスナショナル化する在日フィリピン人の5つの類型、在日フィリピン人の人口動態の変化（高齢化とその事例、困窮化する母子家庭の事例）、高齢化した結婚移民と高齢者を支える多世代居住の日系人のトランスナショナルな生き方などを取り上げた。

第5章において、前半部では、移民を中心とした在日フィリピン人社会の先行研究を1990年代、2000年代、2010年代に分けて、主要なトピックと研究者の研究を取り上げた。後半部では、トランスナショナリズムを内包する移民研究と文化人類学的研究の一端が紹介された。上杉はトランスナショナリズムに関する複数の定義を整理し、「複数の国の国境を越え、長期間継続して頻繁に見られる、移民の多角的帰属ないし多角的ネットワークをめぐる諸現象」と再定義し

た。永田はこれらの定義を引き継ぎ、新しい世代のフィリピン人が、越境するネットワークの形成を通じて、国境を越えた新しいトランスナショナルなライフスタイルを送っている家族の事例を報告している。額賀は、家族中心主義の共通の価値観によって結ばれたトランスナショナルな家族の形成が、「母国送金」、「母国訪問」、「情報技術（インターネット・SNS など）による紐帯の強化」を通じて維持されている様を報告している。

第6章では、群馬県X市の1年半におよぶ現地調査から、フィリピン人の宗教的、親族的、社会的な相互扶助ネットワークの形成の在り方を探る。インタビューや直接観察を通じて、フィリピン人がどのようにトランスナショナルなコミュニティの形成に関わっているか考察する。

具体的には、フィリピン人調査対象者のライフヒストリー、カトリック教会でのミサ後の交流活動、教会を主宰するフランス人牧師の語り、宗教的対立を内包した葬儀の事例を挙げた。

また教会でのミサ後の立ち話に加え「カリンデリア」と称される場のフィリピン人集い、帰国時のある出来事は、宗教や食を通じた限定的な象徴的社会空間での物理的交流があると同時にチャットや SNS などフィリピン本国とのつながりが恒常的に維持されている越境的社会空間である「メタ・コミュニティ」と呼べる2つのネットワークの存在を示唆した。